高山の文化を高めた人

着物に人生を魅了された母 岩畠玲子

岩畠寿尚

文化が溢れ高度成長期が続い 知りました。世の中には西洋 CMで「装道きもの学院」を ていた頃です。 そんな折、ふと見たテレビ

けたようです。 に着付けを習いたいと打ち明 場、ただ、その思いは次第に であり妻であり母でもある立 かに導かれたようでした。 大きくなり、思い切って家族 うにしたい、それはまるで何 着物の文化を絶えさせないよ 三十五歳となっており、嫁 そんな時代を感じながら、

岩畠玲子

ら努力し勉学に励んだと聞い とよく言っていました。 心せよ」の一言が基本にある くな、着物文化を伝える事に かったと話していました。 く承諾してくれ、本当に嬉し 着付け、夜は和裁を学びなが 京本校」に入学してから昼は 上京し「装道きもの学院東 ただ、祖父の「算盤をはじ 結果、祖父や祖母、父も快

し、高山市内へと戻りました。 頃に、その父が病気にて他界 ていましたが、高校へ入った

斐太高校に転入し卒業した 高山四谷洋裁学院に入学

良県などへの転校を繰り返し で、県内をはじめ三重県、

幼い頃から父の仕事関係

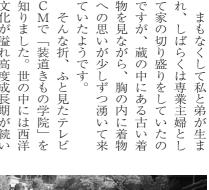
奈

きて資格を取得し、授与式で その後、無事試験に合格で

び結婚しました。

師であった岩畠正泰と縁を結 司書として勤め、数年後、教 その後、斐太高校の図書室で

し、一年間洋裁を学びました。



は代表して謝辞を読んだそう

少しずつ増えていきました。 います。その後、生徒さんも を借りたものだったと聞いて げました。最初の教室はお寺 玲子きもの教室」の看板を掲 を受け、昭和四十四年「岩畠 の道を進んでいきました。 で多くの方に教えながら和装 ら、それからは飛騨地域を中 心に着付けと和裁・組紐教室 喜び高山に帰り家族の祝福 毎日の家事もこなしなが

として高山で生を受けまし

大久保家の三人兄妹の末っ子

昭和七年四月、母・玲子は



日本の文化を知って欲しい 力を注ぎ込みました。 けにも拘り、講座を開くなど 行ったり、伝統ある裃の着付 海外の方にも着物を通して

で若い方への着付けの講師を

和装を通じ、ボランティア

ショーも行いました。 と、高山市デンバー友好協会 デンバーで二回、着物関連の め、色々なイベントに参加し、 人の方への着物体験をはじ の副会長を務めながら、外国

ち活動していました。 の人に散策してもらう夢を持 ある町並みを着物や裃で多く 高山きものさんぽ」では歴史 セル」から飛騨・高山観光コ ンベンション協会での「飛騨 平成二十六年には研鑽を積 高山市主催の「タイムカプ

統文化継承顕彰を受賞しまし んだ事も認められ、岐阜県伝

うべき、先人が培った着物を いたことを覚えています。 の言葉が表していると言って 細かな心配りを「襟を正す」 柄が多く、日本人の心とも言 子和装学院」を設立しました。 大切に身に着け、礼儀作法や 和装とは広い範囲に渡る事 昭和四十九年には「岩畠玲

県伝統文化継承顕彰を受賞

月初旬、母は体調不良を訴え、 月に控えた平成二十九年の二 なと感じていました。 きで、いつまでも元気な人だ ら、人と接する事と着物が好 に参加をしていた母を見なが 五十周年」の発表会開催を七 をはじめ色々な行事に積極的 「岩畠玲子和装学院創立

が出来ました。

げで創立五十周年記念発表会

日を迎え、皆様の尽力のおか

ってか、何とか無事に七月二 ていましたが、母の気力も伴

を高山文化会館で終えること

期と診断されました。 徒の皆さん、協力してくれる それを知っても、とにかく発 精密検査の結果、膵臓癌の末 表会に向けて講師の方々や生 人達と頑張りましょうと平静 いつも凜としていた母は、

を保っていました。 早ければ一カ月と宣告され

動を続けております。 協力を下さった皆様、今も装 生を閉じました。最後の最後 母・岩畠玲子は八十五年の人 畠玲子和装学院もそのまま活 る事を嬉しく思うと共に、岩 いの心を継承して下さってい くの学院卒業生の方々や、ご まで着物に寄り沿い、装いの 心で襟を正した人生でした。 講師になられた方を始め多 その三日後の七月五日に、